

## ブロンテ研究

—アグネス・グレーに見られるアン・ブロンテの信仰—

宮川下枝

Jane Austen, Charlotte Brontë and Elizabeth Gaskell all three were sincerely religious and presented their heroines as believers who conducted themselves according to Christian principles<sup>1)</sup>.

(ジェーン・オースチン、シャーロット・ブロンテ、エリザベス・ギヤスケルこの人は皆真底から信仰深く、女性主人公たちをキリスト教信念に基いて行動する者として表わしている。)と Patricia Beer は *Reader I Married Him* に於いて述べているが、この中には、アン・ブロンテも当然名を列らねてよい女性作家であろう。

先般エミリー・ブロンテの研究に際し、梅光女学院大学英米文学の会誌第9号に於いて、エミリー及びシャーロットの信仰を取扱ってみた。が同じブロンテ姉妹のうち1番末の妹アン・ブロンテにまだ触れていないので、今回はこのアンの信仰について考えを及ぼしてみたい。

而もこのアンが三人姉妹のうちで1番強い純粋な信仰をもっていると評されているのに、最後になってしまった。

彼女の小説 *Agnes Grey* を通してその信仰を追ってみたいと思うのである。作品は構想の点からも技巧の点からも修辞の点からも2人の姉に及ぶものではないであろうが、その率直に述べている信仰、又あらゆる苦難を耐えてゆく信仰的態度には、我々の心を打つものがある。

はじめにアン・ブロンテ自身について考えることにしよう。

彼女はブロンテ家6人の子供達の末娘として1820年1月7日イギリス北西部のソーントンに生れ、母の手に抱かれて、引越の1員に加わり、荷馬

車に揺られながら、坂道の石畳の上をハワース牧師館にやって来たのである。その母が亡くなったのは彼女が僅か1歳8ヶ月の赤ん坊の時であるから母の面影、又病気の苦しみは彼女の脳裡には残っていないのであるが、小説の中に愛情深い母が姿を現らわしているのは、アンを赤ん坊の時から慈しみ、育ててくれた、叔母エリザベス・ブランウェルの姿だと云われている。この叔母は可愛い赤ん坊のアンを見た瞬間から好きになり、この子を自分の思い通りに育てたいと思った程である。

Miss Branwell loved Anne at sight<sup>2)</sup>.

(生れつき弱いこの1番下の妹を姉達は最初から、大変大事にした。「小さな時からアンには早死の覚悟が出来ていたように思われる。」と姉シャーロットは後になって思い起している。)

The elders were, from the very beginning, tenderly attached to the little sister, born so delicate that Charlotte recalled in after years that “from her childhood Anne seemed preparing for an early death<sup>3)</sup>”.

妹のお産の為、暖い南の地コーン・ウォールから遙々手伝いにやって来た姉は、心ならずもこの寒い北の地に1生いついてしまう運命となる。彼等の父、パトリックが再婚する迄と思って妹の死後も6人の子供達の面倒を見ていたのであるが、大勢の子供を抱えた牧師の家庭に快く来てくれる夫人もなかった。3人の婦人に手紙を書いて懇願したにも拘らず、その試みが失敗に終るや、父はかたつむりのように自室に閉じ籠り、食事さえも自分の部屋でするような有様であったから、叔母が踏み止まらなければならなくなった事情もよく分るのである。

Thus the little Brontës' fate was decided. They were to have no stepmother, but a maiden aunt to rule over their home. For better or for worse the die was cast; the future, alone, would show with what results to themselves<sup>4)</sup>.

(かくしてブロンテ姉妹の運命は決った。彼等には継母は来なくて、未婚の叔母が家事をとりしきるようになった。よかれ悪しかれ賽は投げられたのである。彼等にとってどのような結果となるかは、後になってだけ分

---

ることである。)と Winfred Gerin はその著 *A Biography: Anne Brontë* の中で述べている。更に次のような言葉がある。

More than any other of the Brontë children Anne resembled her mother. Anne was unmistakably a Branwell. She was from her infancy a darling child promising early to be the prettiest of the little Brontë girls. She was a good little child with an exceptionally loving nature. From the first Miss Branwell hoped to shape her heart and mind after her own image<sup>5)</sup>.

(ブロンテ家の子供たちのうちで、アンは誰よりも母親似であった。まがいもなくブランウエル家の血を引いていた。幼い時から可愛い少女で姉妹のうちでは、1番綺麗になるのではないかと期待されていた。特別にやさしい性格をもった善良な少女で、叔母のミス・ブランウエルは、この子を身も心も自分の思う通りに育て上げたいと思った。)

メソジスト派の厳しい信仰をもつ叔母の訓育を受けて、彼女がしっかりした信仰を持つに至ったことも当然であろう。

Sad as their motherless childhood must have been, it need never have been “oppressed by sin and woe” but for the gloomy regimen of their maiden aunt<sup>6)</sup>.

(母のない子供達の、幼年期は悲しいものには違いなかったが、罪の念、悲しみに打ちひしがれることはなかった。只陰鬱な独身の叔母の支配の重圧を受けなければならなかった。)

A great affection had always bound the sisters<sup>7)</sup>.

故に (子供たちは深い愛情で結ばれていたのである。)

All true histories contain instruction: (*Agnes Grey* Chapt. 1)

(すべて真実な歴史には、教えられるところがあるものです。)なる文で始る『アグネス・グレー』は殆どアンの自伝小説と云ってもいいようなものであるが、その中の女主人公アグネスはアン自身であり、家庭教師の経験も亦自ら味ったものである。

姉のエミリー・ブロンテは社交を嫌い、1人家に残ってパンを焼き、洗

濯をし、裁縫をし乍ら本を読み、長女シャーロットも家の責任を感じて家庭教師として外に出ていたが、常に不平に溢れていた。それに比べ、この1番可憐なアンが1番長く家庭教師の生活に耐えたのである。

シャーロットの親友エレン・ナッシュはアンを評して、

'dear gentle Anne'. Physically different from her sisters. Anne had lovely violet-blue eyes and clear, almost transparent complexion<sup>8)</sup>.

(体質的に姉達と違って、可愛い、やさしいもの静かな少女で、美しい蒼い眼と澄んだ透き通るような顔色をしている。)と云っているから、このような少女が家庭教師をしたいと云い出した時には、小説の中の主人公の場合と同じように家族の者を驚かせたことであろう。

1836年ローヘッドの学校で学んだ後、1839年19歳の時インガム家の家庭教師となっている。ついで、1841年ヨーク近くのロビンソン家で家庭教師として、5年間働いている。その職を選んだ理由は、小説にも書かれている通り

(1) How delightful it would be to be a governess! to go out into the world; to enter upon a new life; (*Agnes Grey*: Chapt. I)

(家庭教師になるということは、どんなに楽しいことであろう。外の世界に出れるということ、又新しい生活に入るといことは如何に嬉しいことであろう。)

(2) to exercise my unused faculties, to try my own unknown powers; (*Ibid.*)

(自分の使ったことのない才能を用いてみたいこと、又自分の未知の力を試めしてみたいこと。)

(3) to earn my own maintenance, and something to comfort and help my father, mother, and sister, besides exonerating them from the provision of my food and clothing. (*Ibid.*)

(自分の収入を得、父、母、姉を一寸楽にしてあげ、自分の食い扶を減らせるように、)等の理由の為であった。

1846年、3人姉妹の詩集を *Brontës Poems* なる題名のもとに出版したが、これは余り売れず、更に3人はそれぞれの小説を書いて、真価を世に問うことにした。詩の場合と同じように、彼女は Acton Bell なる男名を用いている。この場合アグネス・グレーはアンの手になるもので、1847年12月の出版である。

1848年12月彼女の敬愛して止まぬ、姉エミリーが風邪をこじらせ、肺を悪くして他界するや、既に感染していたアンも急速に弱っていった。自分の死期の近づくのを自覚したアンは、姉シャーロットに無理失理に頼んで、小説の中では夢のような美しい恋の実現を見たA—海岸（実際にはスカーボロの地）に連れて行って貰っている。このおとなしい辛抱強いアンのたつての願を、姉は無下に拒絶することは出来なかった。悩みに悩んだあげく、親友エレン・ナッツイにも相談して、妹の弱り切った体にとっては、実に無謀な旅行を実現したのである。1849年2月のことである。海の空気を吸い、海岸の入目を眺め感激したアンは3日目の夕べ、静かに息を引きとって行った。

枕もとに泣き悲しむ、姉シャーロットを、臨終の息のもとから、「お姉さん、勇気を出して！」と慰さめつつ神の御もとに召されている。海を見渡す丘の上、城のすぐ下のセント・メリーの教会墓地に、ハワース教会内に眠る姉達とは離れて、彼女は只1人静かに憩っているのである。

さて小説の中に現われる、彼女の信仰を追ってみよう。

## 1. 神

Emily Brontë remained virtually silent in public on the question of religion.

(エミリーは真向から、神を述べることはしなかったし、自分の信仰を表明することもしなかった。)

豊田 実博士も「エミリーは1個の *mystic* であった」と述べ彼女の神は神祕物な神であったと云われている。

又姉シャーロットに於いては、パトリシア・ビールも述べる通り、

At three important points in the plot Jane apparently turns to God for support; at Lowood, under the influence and admonitions of Helen Burns; at Thornfield when Rochester tries to persuade her to live with him; and at Marsh End, when St John Rivers urges her to marry him and go with to the missionfield<sup>10</sup>).

(3つの点に於いては、ジェーンは、明らかに神に助けを求めている。ローウッドに於いてヘレン・バーンズの影響を受け、又そのすすめに従い、又ソーンフィールドでロッチェスター氏が一緒になってくれと懇願した折、又次にマーシュ・エンドに於いてはセント・ジョンがジェーンに結婚を強いて、共に外国伝道について来るように強引にすすめた時である。)

神に祈ってその答によって、教えられるように待っているが、彼女の神は自然の中に見出す神でもあったとも云われている。現に小説 *Jane Eyre* の中にも、ロッチェスター氏の激しい求婚にも拘らず、それが重婚の罪になる結婚であると知るや、ソーンフィールドを遁れ出て広野をさまよう。

I have no relative but the universal mother, Nature: I will seek her breast and ask repose.

(私には、宇宙の母なる自然以外には親類もない。彼女の胸によりかかり、その慰さめを求めよう。) その点アンは姉2人と異って、はっきりしたキリスト教の信仰を率直に述べ、神についても明瞭に言及している。彼女はクリスチャンであり、詩人であり、物知りであったとは、批評家も評するところである。4歳の時に父に何が欲しいときかれ“Age and Experience<sup>12)</sup>” “年と経験”と答えたというから、父にとって驚きであったと同じように、我々にも驚きの眼をみはらざるを得ないところである。

She was a scholar as well as a poet and a Christian.

## 2. 祈り

この小説の中には、敬虔な祈りの姿が多く見出される。

物語は先ず父の破産から始まり、その家計の足しになるようにと、アグネスが家庭教師として、懐しい我が家を出て行く処から始まっている。ブルームス・フィールド家という、中産階級の商人とし財をなした人の家庭であるが、家庭教師への俸給は年僅か 25 ポンドという少額であったにも拘らず、小さな胸を躍らせて、未知の世界へと大きな期待をもって出かけてゆく。家族の心配、懸念は細かく描かれているが、特に最後の晩を共に過した、最愛の姉メリーとの別れの場面は胸を打つものがある。小説では姉はたった 1 人ということになっており、エミリー・ブロンテをモデルにしたのであろう。可愛がった動物達にも 1 つ 1 つ別れの挨拶をする。実際ハワースの牧師館には奥に姉妹達が動物を飼っていたという部屋があって、雉・鳩・鶏・たか、何でも餌をやり大事にしていたようである。

又父には、これが最後になるとは夢にも思わぬまま、歌を歌ってあげる。

Then at bedtime, when I retired with Mary to our quiet little chamber, where already my drawers were cleared out and my share of the bookcase was empty—and where, hereafter she would have to sleep alone, in dreary solitude, as she expressed it my heart sank more than ever: and when I knelt once more beside bed I prayed for a blessing on her and on my parents more fervently than ever I had done before. (*Agnes Grey* Chapt. I)

(そして就寝時刻、姉と小さな寝室に入った時には、もう箆笥には私のものはなかったし、本棚の私の分の棚も、もう空っぽになっていたが、そこで姉はこれから 1 人で寝るのだらう。とても辛い、淋しさだと姉は言ったが、私の気持は落ちこんだ。私共の小さなベッドの側に跪いて祈った折には、前にも増して、姉や両親に祝福があるようにと祈った。)

シャーロットもロッチェスターのもとを出て、強い決心のもとに彼の重婚の罪を犯さぬ為にと遁れ出乍らも、広野に夜を明かす時には思わず神に祈る場面があるが、牧師の家庭に育ったこの姉妹達の生活を常に支えたものは、祈りであったことであろう。

アグネスは 1 度目の家庭教師は、その熱心誠実な努力にも抱らず、その

真実さは買われずに首になってしまう。2度目の職場での場面の話に入る。母も真剣になって考えて呉れ、新聞に広告を出し、よい家庭をと探して呉れる。Horton Lodge という上流階級の大邸宅に雇われる。出発したのは1月31日という寒い吹雪の朝、身も心も凍りつく思いで、その夜やっと1日中の馬車旅を終えて、この遠い地に着いたのであるが、この広大な邸の中での受け入れは寒々としたものだった。自分の生徒になる筈の少女が顔を出し、長い廊下を抜けて、アグネスの部屋となるべき粗末な部屋に案内してくれたが「お茶をお飲みになりますか？」ときいたまま消えてしまう。女中によって、薄いバターつきのパンと紅茶があてがわれる。

I sat down beside the small, smouldering fire, and amused myself with a hearty fit of crying; after which, I said my prayers, and then, feeling considerably relieved, began to prepare for bed. (*Agnes Grey* Chapt. VII)

(私は、かすかにくすぶっている暖炉の側に腰を下ろすと、発作的にワッと泣き伏すと気も晴れた。それからお祈りをし、気持も静まって、寝につく準備を始めた。) 惨めな気持の中にも祈りを忘れぬ信仰深い態度が示されている。

だが翌日は元気に目覚め、感激をもって新しい朝を迎えている。

I shall not soon forget the peculiar feeling with which I raised my blind and looked out upon the unknown world: a wide, white wilderness was all that met my gaze: a waste of Deserts tossed in snow, and heavy laden groves. (*Ibid.*)

(翌朝、ブラインドを開けて、見知らぬ地を眺めた時の気持は忘れられない。私の眼に映ったのは広い1面の白い広野ばかりで、雪の中に起伏する荒地、あつい雪に掩われた森であった。) 祈りによって強められ、慰さめられた姿であろう。

“To me to live is in Chirst.” (我にありて生くるはクリストなり。)

これはハワース牧師館、現在の Museum に陳列されているブロンテ家の遺品のうち、叔母ブランウエルの用いていた、teapot で藍色に白字の浮



き出したもので、人々の印象に残る品であるが、この日々叔母の用いた茶器に、常に眼を止めていた姉妹達の心に刻みつけられた文字であったろう。これは、アン的心中にはそのまま強い信仰になっていたのである。最初の家庭での、家庭教師とは名のみにて、いたずらな手に負えぬ子供達の<sup>てい</sup>体のよい子守であることが分った時も、

The name of governess, I soon found, was a mere mockery as applied to me... (*Agnes Grey* Chapt. II)

彼女は、重過ぎる新しい経験に喘ぎつつも、決して挫じけることなく耐えてゆく。困難は私に味つけをして呉れた、と淡々と述べている。Stronger than a man. 姉シャーロットが妹エミリーの強さを讃えた言葉であるが、強さということは、ブロンテ家の血を引くものであった。

### 3. 正義

信仰によって、如何なる苦難にも耐えようとしたアグネスであったが、又正しいと思ったことはたとえ雇い主の前であろうと、1歩も退かぬ強い意志を持っていた。ブルームス家のいたずら坊主達は、手に負えぬ悪童達であって、先生に体をよじりしかめつらをして見せたり、奇妙な叫び声をあげたり、アグネスを困らせる。

...he would stand twisting his body and face into most grotesque and singular contortions and uttering loud yells and doleful outcries... (Ibid.)

ある日のこと、この少年トムは子鳥の巣を取って来て、小さな雛たちをいじめて喜んでいる。半殺しのようなひどい目に逢わせて弄てあそんで居るのを見ては、アグネスは我慢出来ない。

I shall not allow you to torture those birds; They must either be killed at once or carried back to the place you took them from, that the old birds may continue to feed them. (chapt. V)

(この小鳥達をいぢめることを許しません。すぐに殺してしまうか、又は親鳥が育くむことが出来るように森に返しておやりなさい。)

だが、先生の言葉に耳を借すような少年ではない。

“But if you don’t, I shall kill them myself.”...So saying—urged by a sense of duty.....I dropped the stone upon his intended victims and crushed them flat beneath it. (*Agnes Grey* Chapt. II)

(もし、あなたがやらないのなら、私が自分で殺します。と云うや否や、アグネスは義務観にかられ、大きな石をとりあげるとその少年のこれからいじめようとする犠牲者の上に、落とし、ペしゃんこに押し潰してしまおう。) 一と思いに殺す方が、ひどいいぢめ方をするより、ずっと親切なことだと思つと、それが雇主の長男であろうと、遠慮はしなかつた。『生きものは、子供のいたずらの為に創造されたものではない』と主張する。結局、彼女はこのことの為に解雇されるのであるが、彼女は決して絶望することはなかつた。総べての夫人がブルームス夫人のような分らず屋でもなく、すべての子供達がブルームス・フィールド家の子供達のように、いたずらっ子でもあるまいと諦め、自分を慰さめると、家へと帰って行く。

I had been seasoned by adversity, and tutored by experience. (*Ibid.*)

(私は逆境に立ち向うことで豊かになり、経験によって成長して来た。) 信仰によって強しの態度である。

#### 4. 寛容

寛容は、又アグネスの信仰的態度の別の面である。第一の職場を追われたアグネスは、暫し家庭で静養したものの、先述の通り更に新たな職場を求めなければならない。今度は母も慎重に新聞広告など出して、ずっと上流の教養のある家庭を探してくれるが、これは非常に離れたヨーク近く of 海辺のまちであった。大邸宅に着いた最初の晩のことは祈りの項に於いて先述したが、上流の家庭には家庭で又煩らわしい問題があつた。

ここでの生徒は、ずっと大きい2人の令嬢であつたが、上娘は16歳、まさに社交界にデビューしようとする美しいさかり、夫人も社交界の華であるが、この婚約の決つた令嬢は結婚で身を縛られる前に自由な遊びがしたいと独身の牧師を見事、夢中にさせてしまう。そして、彼から勇気を出しての申し込みを受けるや、ものの見事に拒絶して、その苦渋に満ちた顔を

見て、満足しているのだから始末が悪い。それだけですむのなら、苦痛を与えることはないのだが、アグネスのほのかな念い迄、摘み取ってしまをうとするのであるから残酷極りない。

アグネスが秘かに憧れている、副牧師のウエストン氏を教会の帰り、散歩に誘ってみたり、彼の外出の予定を知るや先廻りをして、野原に彼を待ち受ける等、手のこんだ策略を尽す。又教会の礼拝が終って令嬢はお仲間のアグネスを従えウエストン氏を促して3人で帰途につく。

she accosted him with one of her sweetest smiles, and, walking by his side, began to talk to him with all imaginable cheerfulness and affability and so we proceeded all three together. She engrossed him entirely to herself and saw with anxiety the bright smile with which she looked into his face from time to time. (*Agnes Grey* Chapt. XV)

(彼女は1番美しいほほえみをもって、彼に話しかけました。肩を並べて歩きつつ想像出来る限りの快活さと、愛想のよさで話しかけ始めました。私共3人は肩を並べて歩きましたが、お嬢さまはウエストン氏の心を完全に惹きつけ、時々気懸りそうに明るい笑顔で彼の顔をのぞきこみました。)

だが賢明なウエストン氏は、小賢しい令嬢の手にのることはなく、アグネスの真価を認めていて、その誘いに陥落することはなかったから、助ったものの、令嬢は、暫しの遊びの楽しみを味うと、やがてアッシュビー男爵新夫人として豪壮な邸宅に住む身となる。だがバリー、ローマへの新婚旅行も終って、新しい家庭に納ると、そこには夫の母であるアッシュビー老夫人が権力をふるっているところであり、夫は幾人もの女を持った道楽者で、彼女に幸福はなかった。この時彼女が、しみじみと思ひ浮べたのは自分の母でもなく、ましてや父でもなく、彼女のことを常に真心をもって考え導いてくれた、かつての家庭教師アグネスであった。是非逢いに来て下さいとの昔の先生を懐しむ手紙が届く。あれ程意地悪をした令嬢である。だがアグネスはその折の憤りも忘れて逢いに出かけてゆく。一回では見きれない程の大邸宅の中でゆったりした部屋を与えられ、この上ないも

てなしを受けるのだが、アグネスはこの表面幸福そうに見えるアッシュビー男爵新夫人の心の中には、風が吹きすさんで居ることを知る。夫えの失望、姑なる人の権力、何一つ自由を与えられていない新夫人の立場を訴えられて、アグネスの心の中にはこの莫大な富に対する羨望も昔の怨も何もなかった。

“And now, Lady Ashby I have one more piece of advice to offer you, which is you will not make an enemy of your mother. Don't get into the way of regarding her with jealous distrust.” (*Agnes Grey* Chapt. XXIV)

(お姑さんに敵意を持つてはいけませんよ。お姑さまが敵意を持っていらっしゃるに、持つていらっしゃるだろう等とありもせぬ想像をして対してはいけませんよ。)

と穏やかに諭している。現在に満足して生き、自分自身に幸福をもたらすように生きることを教える態度は「敵をも愛せよ」との聖書の言葉通りの信仰深い姿の現れである。

アグネスを通して語られるアンの信仰は第11章、小作人の章の中に、非常に多く盛られているので、この章より彼女の信仰の歓び、悩み、確信をみてみたい。

ロビンソン家の娘、特に姉嬢のマーレー嬢は、暇な折は家庭教師を従えて領地内の小作人達の家を訪れ、その貧しい小作人に親切の押し売りをするのが楽しみだった。だがアグネスは余暇を見出しては、そっと一人で出かけ、困っている老女に一寸した仕事の手助けをしたり、眼の悪い婦人に聖書を読んであげたり、又は心からの慰さめをかけることを好んでいた。こうした家々に新任の副牧師ウエストーン氏は、度々訪れて、彼等に力強い信仰を与えていることをアグネスは知るのであった。

この純朴な、婦人の読んで欲しいと思う聖句は、

“God is love, and he that dwelleth in love dwelleth in God, and God in him.

(神は愛である、愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。)

---

であるという、ヨハネ第一書だと彼女は云う。それは第4章にあった。丁寧にゆっくり読んであげると喜んだ婦人は新任の副牧師が如何によい人物であるか等話をしてくれる。

教会に行くのは義務だと決めつける現在の牧師に対して、ウエストン副牧師は気分の良い時は出ていらっしやいとすすめてくれる。

He is your father, your best friend: every blessing, everything good, pleasant or useful comes from Him: and everything evil comes from Satan. And for this cause was God manifest in the flesh, that He might destroy the Devil: in one word. God is Love: and the more of love we have within us, the nearer we are to Him and the more of His spirit we possess". (*Agnes Grey* Chapt. XI)

(神はあなたがたの父であり、一番の友である。すべてよきこと祝福されること、快きこと、有益なることは神より来る。そしてすべて悪しきことは悪魔より来る、この理由の為に、即ち悪を滅ぼす為に神は肉体をもって現れ給うたのである。云い換えれば神は愛である。愛のうちにある程、神に近ずき、神の霊を我々のうちに持つのである。)

この深い愛に溢れる教えにより、この老婦人は、心からの安堵を覚えるのだが、これはアン自身が信仰に悩んでいた頃の姿である、この老婦人が牧師に訴え、

but that didn't mend my soul. I hearkened and hearkened the ministers, and read an' read at my prayer-book; (*Ibid.*)

(いくら立派なお言葉をきいても読んでも、少しも立派になれぬ。) という悩みは、アン自身が深く苦しんだ暗黒の時代の経験である。

## 5. 敵を愛せよ

又この婦人は隣人の婦人を愛せない理由を正直に述べる。だがウエストン氏は静かに諭す、

"It may seem a hard matter", says he, "to love our neighbours, who have so much of what is evil about them, and whose faults so often awaken

the evil that lingers within ourselves; but remember that He made them, and He loves them” and whosoever loveth him that begat, Loveth him that is begotten also. (*Agens Grey* Chapt. XI)

(悪意を持っている隣人を愛するという事は、困難に思えますね。又その人達の持つ欠陥は、我々の中にもひそむものですが…、でも神がその人たちをお作りになったことを忘れてはいけません。隣人を愛する人は許されるのです。)

これは、ウエストン氏が語る言葉として書かれているが、次の

If we love God and wish to serve Him, let us try to be like Him. to do His work, to labour for His glory—which is the good of man—to hasten the coming of His kingdom, which is the peace and happiness of all the world. (*Ibid.*)

(もし我々が神を愛し、神に仕えたいと望むならば、神に似るようにしましょう。神の為に尽し、神の栄光の為に働きましょう。それが人間の幸せとなり、御国の来ることを早め又それが全世界の平和・幸福なのであります。)

なる言葉はアンの信仰の真髄、遂に彼女の到達した確信と考えてよいのであろう。

こうした尊敬出来る副牧師ウエストン氏を迎えることにより、アグネスの心の中にはその尊敬が憧憬え、そして秘かな愛えと変形してゆくのである。

In stature he was a little, very little, above the middle size; the outline of his face would be pronounced too square for beauty, but to me it announced decision of character; (*Ibid.*)

(中背で誠に小さい人だったし、顔の輪郭も四角で美しいとは言えなかったが、私にはその顔形は意志の強さを示しているように思えた。)

最後にアンが死を超克するに至った過程を述べて、アンの強い信仰を偲んで終りにしたいと思う。同じく Winifred Gerin の *Anne Brontë* に依るものである。

---

姉エミリーは力強く、死に耐えている。病気にも耐え、医者 を 拒み 続け、最後迄自分の務である家事をしようと衰え切った体に勇気を鼓して、二階から降りて来て、やっと「お医者様を呼んで」と言って居間のソファに腰を下ろして死んだことは余りにも有名であるが、おとなしいアンは従順に医者 の 診断 も 受け、薬も飲んで姉シャーロットの云うことをよくきいている。だが

...even had she been lent the physical strength, was spiritual impossibility<sup>13)</sup>.

愛する姉エミリーを失ったアンの魂は生ける屍であった。

the air she breathed and the food she ate, as a source of life<sup>14)</sup>,

姉は彼女にとっては呼吸する大切な空気であり、又口にする食べ物であり、生命の根源でもあった。エミリーの死はアンの根底から生きる力を奪い取ったのであるが、決してその絶望を顔には表わさず、平静さを装っていた。

Capitulation, indeed, was not a word in the Brontë vocabulary<sup>15)</sup>.

(降伏という言葉はブロンテ家の言葉の中にはなかった。)

全力を尽して自分の運命に立ち向ったのであるが、既に感染していたアンの胸は医者 の 診断 に 依れば両肺とも冒され回復の希望のないものであった。だが彼女はエミリーの葬式に駆けつけたエレン・ナッシュイに対しても明るく振舞い

Anne was looking sweetly pretty and flushed and in capital spirits for an invalid...<sup>(16)</sup>

(アンはとても可愛いくて、綺麗で頬には赤みを帯び、病人にしては凄く元気でした。)と云わせているのである。

In her darkest hour Anne stood alone, opening her heart only to her God<sup>17)</sup>.

(彼女が自分の心を開いているのは、唯一人神に対してのみであり、死を目前に控えた暗黒の時期に於いても独り勇敢に耐えている。)だが唯、

勇気を持って平然と耐えられたかと云うと、決してそうではない。悩みに悩んだ末、やっと死を迎える勇気を与えられたこと、死に対する心の葛藤があったことは、アンの最後の詩で明らかにされているのである。1849年1月7日、たどたどしい字乍ら認めたという詩は次のようなものである。

A dreadful darkness closes in  
On my bewildered mind;  
O let me suffer and not sin,  
Be tortured yet resigned.

怖じまどう心の上に  
恐しい暗闇が迫って来る、  
どうか罪を犯さずにすみませうように、  
苦しんでも諦めてしまうことが  
ありませんように。

Through all this world of blinding mist  
Still let me look to Thee,  
And give me courage to resist  
The Tempter till he flee

この一寸先も見えぬ霧に掩われた  
暗闇の世にあっても、どうか神さま！  
あなたを見つめさせて下さい。  
誘う者が逃げ出す迄それに立ち向う勇気を与えて下さい。

Weary I am—O give me strength  
And leave me not to faint;  
Say Thou will comfort me at length  
And pity my complain

私は疲れ果てています。ああ、力を下さい。  
息切れさせないで下さい、  
最後には神さま、あなたが私を慰さめ、  
このつぶやきを憐んで下さると



仰っしゃって下さい。

I've begged to serve Thee heart and soul,  
To sacrifice to Thee  
No niggard portion, but the whole  
Of my identity<sup>18)</sup>.

(私は身も心も、あなたに仕えさせて下さいとお願いしました。  
全心全霊をもってあなたに身を捧げることをお約束しました。)

全部で16章から成る長い詩であるが、この死の不安との闘い、力の限りに祈り求めて得た平静さに依り、「お姉さん勇気を出して」と泣き悲しむシャーロットを反対に元気付け乍ら、自分の信ずる神のもとに召されることを信じて最後を迎えた信仰へと完成していったのである。

悩み苦しみの余り、主を捨てることのないようにとの必死の祈も成就して、あっぱれ見事な最後であった。1849年アン29歳の年であった。

#### 註

- |     |   |                            |
|-----|---|----------------------------|
| 1)  | Patricia Beer; <i>Reader, I Married Him</i>               | p.12                       |
| 2)  | Winifred Gerin; <i>B Biography, Anne Brontë</i>           | p.13                       |
| 3)  | " "   | p.13                       |
| 4)  | " "   | p.17                       |
| 5)  | " "   | p.13                       |
| 6)  | " "   | p.17                       |
| 7)  | " "   | p.14                       |
| 8)  | " "   | Local History Cards No.237 |
| 9)  | John Herish: <i>Emily Brontë, a Critical Biographical</i> | p.58                       |
| 10) | Patricia Beer: <i>Reader, I Married Him</i>               | p.129                      |
| 11) | Charlotte Brontë: <i>Jane Eyre</i> Chapt. 28              | p.349                      |
| 12) | Winifred Gerin: <i>A Biography: Anne Brontë</i>           | p.20                       |
| 13) | " "   | p.297                      |
| 14) | " "   | p.297                      |
| 15) | " "   | p.297                      |
| 16) | " "   | p.298                      |
| 17) | " "   | p.298                      |
| 18) | " "   | p.p.299-301                |